

2024年度 学校経営方針

《 統合新校「本町田ひなた小」へのアップグレード 》

町田市教育プラン 2024-2028（初年度）

【教育目標】 自ら学び、あなたと学び、ともに創る町田の未来

生涯を通して
自ら学び続ける力

学び続ける力

課題を見つけて他者と学び合い、
協力して解決する力

学校教育で培われる「学び続けられる力」の要素

挑戦 ポジティブ 粘り強さ 自己理解 他者受容 協調性 など

【子どもたちが生きていく近未来社会】

（新学習指導要領）⇒「Society5.0」：

- ⇒ 多様性を認め、他人と協力して価値を創造し、AIにない資質・能力を伸ばす
- ⇒ 知識の習得だけでなく、知識を使う能力（思考力・コミュニケーション力）

【文部科学省の政策：中教審教育課程部会より】

⇒「令和の日本型学校教育」の構築

- ・「協働的な学び」と「個別最適な学び」との往還による一体的な充実
- ・9年間を見通した新時代の義務教育の在り方～「誰一人取り残さない」

【2024年度の経営戦略の視点】 ← 統合新校「本町田ひなた小」の教育目標の策定
（本町田東小・町田第三小との連携）

- 本町田小の伝統の踏襲と並行した、教育効果の検証に基づく「改善と挑戦」
- 統合新校に向けた、令和の日本型学校教育の方向性の模索
- 「同僚性」を高める教員集団による、「対話」のある「協調」できる学校風土
- 人との繋がりを大切に、共に成長し続ける学校と地域の「協働」体制の確立
- 新たな学校づくり推進事業に伴う、学校統合に向けた「協創」の基盤づくり

【統合新校「本町田ひなた小」に向けての課題と改革の方向性】

- ・地域協働の活動を生かした本町田小独自の活動の維持と、旧態依然の体制の見直しの必要性
- ⇒ 2校統合を見据えた生活指導体制の改革、校務分掌組織の改編による教員の参画意識の向上
- ・「協働的な学び」と「個別最適な学び」との往還による一体的な充実のための指導体制の構築
- ⇒ 本町田地区の学校として、めざす児童像と指導方針の方向転換 = 校内研究での実践
- ・教職員構成（半数が特別支援教育担当、主任教諭）から見えてくる学校運営参画意識の格差
- ⇒ 教員間の連携強化による、個々の専門性を生かした指導力の向上 = 「学校としての強み」に
- ・協力的な地域資源を生かし、家庭の教育力の高めるコミュニティースクールの在り方の見直し
- ⇒ 閉校関連行事への協力要請、学校統合に向けた準備を進める中での「三位一体」での学校づくり
- ・地域の教育資源の開拓と、新旧交代、学校統合による教員の入れ替わりを見据えた人材育成
- ⇒ 地域や社会とのつながりを大切に、知性・創造性を育む教育課程の実現のための体制づくり

【人と人との繋がりの中で、学びの基盤を定着させる学校づくり】
「新たなふるさと」～統合新校「本町田ひなた小」へのアップグレード
基本方針Ⅳ 施策1： 学校と地域が連携した学びを推進する

2024年度の学校経営の3つの重点目標

(1) 重点目標① — 【めざす学校像】

(学校統合をふまえて)

「安全・安心・安定の拠点となる地域協働のコミュニティスクール」

○安全・安心の学校生活

すべての傷病や交通安全など、児童の健康や安全の管理を徹底し、各種感染症予防や感染不安への対応を継続しつつ、児童の日常生活をきめ細かく見守るとともに、町田市教育委員会の様々な施策にも迅速に実施・徹底し、児童の体も心も守っていける学校をめざしていきます。

○保護者・地域との信頼関係で築く安定した学校生活

— 子どもたちにとって一番の場所になるためにめざす3つの学校像

1. 子どもたちが縦にも横に繋がっている学校

- ・「わからないことをわかる」「できないことをできる」ようにしてくれる先生たちがいて、みんなでいっしょに勉強したいと思える学校
- ・わからない、できない子どもに対して、粘り強く教えてくれる先生や地域の人たちがいて、できたことをほめて励ましてくれる学校
- ・子どもたちが当番や係、委員会などの仕事にすすんで取り組み、手本となって働く上級生やクラスメイトがいて、いっしょに頑張れる学校

2. みんなに会えるから楽しいと思える学校

- ・子どもたち一人一人の居場所があり、おもしろいこと、楽しいことがたくさんある学校
- ・クラスがいじめや暴力のない楽しい場所になり、一人がみんなのことを思い、みんなが一人のことを思いやることのできる学校
- ・先生たちがいつも子どもたちのそばにいて温かく見守り、楽しいときも、悲しいときも、子どもたちの心に共感してくれる学校

3. いろいろな人からいろいろなことが学べる学校

- ・おもしろい授業や行事、体験教室、スポーツ活動、集会など楽しい活動がたくさんある学校
- ・先生たちや地域の方々が、めあてをもって学習や生活に取り組む子どもたちを見守りながら、いろいろなことを指導してくれる学校
- ・子どもたちが、先生や友だちの応援を受けて、興味のあることやできないことにも挑戦することができる学校

○保護者・地域との信頼関係で築く安定した学校生活

就学援助対象家庭が35%を超え、共働きや一人親などの家庭が多いこの地域では、学校生活の中で育てる「自主自立・自学自習」の姿勢や、基本的な生活習慣を身につけさせる必要があります。コミュニティスクールとして、学校運営協議会への情報発信を行って理解・協力を求めながら、社会（地域）に開かれた学校経営を行います。

1日の大部分を占める学校での生活が、全児童にとって「安全で、安心できる安定した」ものになるよう、学校は、常に寛容性のある家族のような温かい愛情で児童一人一人に寄り添い、常に問題を未然に防ぐ危機管理意識をもち、何事にも全教職員の心と力を結集して取り組んでいきます。

(2) 重点目標② —【めざす教師像】

「互いに認め合い、支え合い、学び合いながら、
子どもたちと積極的に関わる教職員」

○子どもの成長は教師自身（自分自身）の喜び = 子ども中心主義の考え方で
— 子どもたちにとって、一番の理解者になるためにめざす3つの教師像

1. 子どもたちのお手本になれる教師 — 教師の背中を見て子どもは育つ

- ・誰に対しても公平でやさしく、思いやりにあふれている教師
- ・どんなことにも一生懸命で、言ったことは最後までやり通す教師
- ・いつも誰に対しても明るく、元気にあいさつができる教師

2. 個に寄り添い、肯定的な児童理解に努める教師 — 関わりなくして理解は進まない

- ・子どもたちとの距離が近く、積極的に子どもたちの中に飛び込んでいける教師
- ・様々な言動の裏に潜む子どもたちの心理に、常に敏感な教師
- ・一人ひとりの違いを認め、広く多面的な視野で子どもを理解しようとする教師集団

3. 子ども目線で物事を考えられる教師 — 大人の理屈を押し付けない柔軟な対応

- ・何よりも子どもたちの声に耳を傾け、それぞれの思いに気付ける教師
- ・教師としての経験を活かしたり、いつでもリセットしアップグレードしたりできる教師
- ・同じ視点に立って子どもたちを導き、子どもの世界観を大事にできる教師集団

○児童に充足感を与える支援と、良い行動を導く気配り

本校児童の中には、自らが受容され、愛され、満たされているという満足感を得られずに、愛着行動を求める児童が多く在籍しています。そのため、学校生活においても、そのような児童に対する受容感を与える接し方をすることが不可欠です。指導において、時に厳しさも必要ですが、厳しく叱られることや罰を与えられることに慣れてしまっている児童も多いです。管理一辺倒の厳し過ぎる対応は、期待する効果は得られず、むしろ教員との良好な関係を阻害することになります。

○個別の支援や優しさに対する感謝の気持ちから自主性の育成に

教師から助けてもらった、手伝ってもらったという感謝の気持ちは、教師に対する信頼だけでなく、児童自身の自主性にもつながるものと考えます。ただ単に児童を注意するのではなく、教師はまず先にその子の良さを認めながら、同時にその子に合った支援を考えることが肝要です。個々の教師がこのような考えのもとで、学年・学級の枠組みにとらわれず、積極的にコミュニケーションを図りながら、支え合い、協力し合う職員室づくりをめざします。

○学年全体を学年の担任だけでなく、専科・サポートルームの先生と連携して進める学年経営

学年会は、定期的に専科やサポートルームの先生を加えて実施し、必要に応じて校長・副校長など管理職も加わりながら、教職員の総力を挙げて行っていきます。

学年集会・学年体育を基本に、中学年からは学年での実行委員制度も取り入れて、児童自身が同学年のすべての友達のことを考えながら話し合いを進めさせ、自分たちで目標を設定して、自分たちの言葉で語り合い、自分たちで振り返り、評価、反省するという一連の流れを確立していきます。

○誰からも信頼され、頼りにされる包容力と調整力のある管理職

学級経営の基盤が、確かな児童理解に基づく信頼関係にあるように、校長・副校長自らが、児童、保護者、教職員、地域の実態をよく知ることが学校の安定につながります。管理職が、日々起こる問題を未然に防止する方策を提案し、具現化するとともに、問題発生時には、それぞれの気持ちを受容的に受け止め、解決する包容力と調整力をもたなくてはなりません。学校生活や家庭生活、地域生活の中で起こるトラブルにも、最善の解決策を提案、調整することができるよう努めます。

(3) 重点目標③ — 【特色ある教育】

「一人一人の違いを受け止め、良さを伸ばして成長に繋げる特別支援教育」

○3つの特別支援教育をつないで、全ての児童に最適の教育を

みどり1組（知的固定）・みどり2組（情緒固定）・サポートルーム（特別支援教室）の特別支援教育の専門知識や指導法を、双方向で学び合う共に、通常学級での指導に活用していきます。

学校全体から、特別支援教育に対するマイナスイメージの先入観を取り去り、「できないことが目立つのではなく、できることをほめて伸ばしていく特別支援教育の良さ」を学校全体に広げ、どの児童も、その子の「いま・ここ」の実態に適した教育が受けられる学校をめざしていきます。

○児童の適性に合わせた計画的な交流活動・交流授業

通常の学級、みどり学級との交流活動や交流授業を計画的に行って、短いスパンでのPDCAを繰り返し、通常の学級の児童、特別支援学級の児童が、自然に認め合いながら成長する環境を作っていきます。インクルーシブ教育の妨げになるような差別意識をもたせないように、細心の注意を払い、トラブルを未然に防ぐとともに、トラブル発生時には、双方の担任が加わって丁寧に解決していきます。

3つの重点目標からめざす学校教育目標の重点【めざす児童像】

◎自ら考え努力する子 ●思いやりのある子 ●体をきたえる子

(4) 【めざす児童像①】

「自ら考え努力する子ども」⇒ **知** 教わることを教えることが好きな子ども
—「自学自習」の姿勢で主体的に学び続ける児童の育成—

1. 一人一人の子どもに寄り添い、「自学自習」の意欲を育てる学習指導

- ・生きる力のもとになる基礎学力「読み・書き・計算」の確実な定着
 - ・ユニバーサルデザインの視点による授業改善と学習規律の確立
 - ・学びに向かう力や人間性を高め、集中して課題に取り組める児童の育成
 - ・一人一人の児童の特性や学力に配慮した個別最適な学びの実現
 - ・放課後算数教室、夏季休業中補習による、誰一人取り残さない指導の徹底
 - ・授業への切り替えと生活習慣の安定を図る、全校一斉での「本小タイム」の継続
 - ・発達段階に応じたタブレット端末の有効活用と、情報モラルの徹底
- 「自学自習」の心を育てるために
- ・宿題提出の徹底と未提出児童の把握、必要に応じての個別指導・支援を推進していきます。
～未提出、未実施を放置せず、家庭との連携、学年や管理職との相談で解決を図ります。
 - ・学習用具の準備や宿題など、授業での学びを補完するための家庭学習を定着させます。
～保護者との連携を深めるとともに、学習用具の不備を理由に、授業に参加できないということがないように配慮します。
 - ・体験的・課題解決的学習を計画的に実施し、学ぶ意欲・追求する意欲を育てます。
～教師が主導し、ボランティアコーディネーターと連携を図りながら、地域の教育資源を活用し、地域や社会とのつながりを大切にした、開かれた教育課程の実現をめざします。
- 一人一人の子どもの基礎学力の定着は、これまで同様に重要な課題となりますが、より効果的、効率的に指導の工夫や改善を推進していきます。引き続き、全ての教職員で、学習の苦手な子に寄り添いながら支援し、全ての子どもたちに、真面目に努力する心を育て、積極的に文章を読んだり、漢字の読み書き、計算力を身に付けようとしたりする態度を育てます。

- 読書指導の充実及び各教科等における学校図書館の活用
 - ・国語の読みの力を育成するために、読書活動を重点化し、低学年での文字習得や読み方指導を徹底すると同時に、図書館で本に親しみ、様々なジャンルの本と出会う機会を増やします。
 - ・中学年以上では、学校図書館を活用した読書活動や教科横断的な調べ学習を進めるためのカリキュラムマネジメントを行い、児童の集中力・想像力・国語力を涵養します。
- 子どもたちの「自己肯定感」を高める工夫
 - ・丁寧な書字の指導、学習の積み重ねを表すノート指導の徹底を図り、学習の成果を保護者とも共有しての評価を行います。(日々の担任のコメントやノートコンテストの実施など、学年・学級単位で評価を行い、賞賛します。)

2. 校内研究「学びに向かう集団をつくる特別活動」

- ・児童の主体性を伸ばし、豊かな人間関係の形成と自己実現を図る集団活動での指導
- ・「豊かで楽しい学校生活」を目指した児童会、クラブ活動、委員会活動の運営
- ・学校行事に実行委員制度を導入し、思いやりの心や集団の一員としての参画意識を醸成
- ・計画的なたてわり班活動による、異学年の人間関係の構築と高学年のリーダー性の育成
- ・目標設定、計画立案、運営、反省、改善のサイクルによる高学年の自治的実践力の育成

～ 2013年度以来継続してきた「学力向上」に焦点を当ててきた研究の視点を転換し、本町田地区の学校に共通する「基礎学力の定着」と「生活指導面の安定」の両面の課題解決に加え、新たな人間関係な構築のための相互理解や他者を尊重することの大切さを学ぶことを重視した研究にシフトします。

～ 前年度の研究主題「主体的な学びを引き出す教育ツールを活用した授業づくり」から浮かび上がった本校児童の課題である、「聞く力」や「学習における主体性」、「自分の意見をもつこと」などを念頭に置き、児童一人一人の活躍と自尊心に焦点を当てた研究を進めます。

(5) 【めざす児童像②】

「思いやりのある子ども」⇒ **徳** 相手のことを考えられる子ども
 —豊かな心と「自主自立」の精神を兼ね備えた児童の育成—

学校の決まりを守り、みんなが安心して生活することのできる、居心地の良い学校を自主的につくる「自主自立」の心を育てる生活指導

1. みんなで見守り、みんなで寄り添う生活指導

- ・Plan・Do・Check・Actionで、全職員の協力による声かけ・見守り・徹底・評価を行います。(小さな成長も大きく認め、自己肯定感を育てます。)
- ・看護当番による、登校時、休み時間、清掃時間、放課後など、「いつも先生がそばにいる見守りと声かけの生活指導」を徹底します。
- ・週末の生活指導夕会での情報共有と生活目標の設定(看護当番の引継ぎ)、児童の生活実態を把握し、予防的な生活指導を推進します。
- ・複数の特別支援コーディネーターによる、学級や学年の枠を越えた配慮児童への対応策を協議し、学校生活の全体の安定を図ります。
- ・不登校傾向の児童や登下校時に問題の起こりやすい児童には、最優先に個別の寄り添いをチームで進めていきます。

2. 学年全体で子どもを育てる学年経営

- ・学年会の日常化と、専科・交流みどり学級・サポートルーム担任との学年会を実施します。
- ・担任それぞれの特色・個性を認め合い、できるだけ、共通の教材や指導法を実施できるように、分担したり、情報交換をしたりします。
- ・良いところは学年で共有し、弱いところはみんなで支え合う一枚岩の学習指導・生活指導を徹底します。
- ・児童・保護者の問題には、その背景を理解し、いつも複数対応であたる学年の連携を強化します。
- ・学年集会・学年遊び・学年体育の実施、少人数指導の活用を進めます。
- ・専科授業の安定に向けて、担任ができる指導として、忘れ物の補助や教室移動時の引率だけでなく、授業開始時、授業中などの見守りや専科授業後に自己反省させるなど、支援体制を整えます。

3. 楽しく「自主自立」の心を育てる、みんなが主役の特別活動の充実

- ・「より良い本町田小学校にするために、自分たちにできること」を考える自主的活動を推進します。
- ・たてわり班活動の充実とすべての子どもが活動、活躍できる集会を実施（リーダーとしての6年生の育成）します。
- ・「あいさつ」、「言葉遣い」、「廊下歩行」のそれぞれの啓発運動について、生活指導部との連携を図って推進します。
- ・「実行委員活動の充実」行事や学年活動について、できるだけ実行委員による自主的な活動を取り入れます。自主的な目標の設定と児童による評価や反省など、児童が意見や考えを発表する場面を多く設定し、先生に言われるからやるのではなく、自分たちでよりよい学校生活をつくっているという自治意識を、早い段階から育てていきます。

(6) 【めざす児童像③】

「体をきたえる子ども」⇒ **体** 決めたことを最後までやり抜く子ども
—心身ともに健康で常に全力を尽くす児童の育成—

1. 健康な体をつくる基本的な生活習慣づくり

- ・「早寝、早起き、朝ごはん、歯磨き」に取り組み、自ら健康な生活をしようとする生活習慣を育みます(パーフェクト賞表彰)。
- ・安全でおいしい給食の実施と、食育による生命尊重の教育を推進します。

2. すすんで運動し、体力向上を目指す児童の育成

- ・学年体育やなわとび、マラソンなどの体育的活動を充実し、体力づくりに努めます。
- ・学年体育や学年集会の充実 — 学年全体のTT授業を増やし、運動会や水泳指導だけでなく、学級間の体育授業の格差をなくしていきます。
- ・体力テスト結果の分析を踏まえて、体力テスト種目を日常的に行っています。
- ・連合スポーツ大会を成功させ、スポーツを楽しみ、体力向上を目指す心を育てます。
- ・オリンピック・パラリンピックレガシー教育によるフェアプレー精神を育成します。

学校教育目標の重点（めざす児童像）をふまえた上で、

3つの重点目標・学校教育目標を達成するための基盤

「地域協働の学校づくり」

(7) 【めざす地域像】

「安全・安心・安定の拠点となる地域協働のコミュニティスクール」

○ 「地域協働の学校づくり」地域に学び、地域とつながり、地域に返す活動の充実

○ 社会に開かれた学校づくり（地域との連携による教育の充実と、学びを通じたコミュニティの形成）

- ・月1回学校運営協議会を実施し、授業を中心とした教育活動の参観と意見交換による、外部評価を充実させ、短いスパンでの改善を図ります。
- ・コミュニティ委員会の活動を充実させ、楽しい体験活動を実施し、児童、保護者、地域との間に、顔と名前のわかる人間関係をつくります。
- ・地域の教育資源を活用し、体験学習やクラブ活動、放課後ステップアップ教室などの活動の充実を図ります。
- ・土日を活用した活動（工作教室や地域のイベントなど）、夏休みのサマースクールの工夫を推奨し、子どもたちの居場所づくりを進めます。
- ・保護者・地域に向けて、学校の教育活動を知らせ、理解と協力を得ます（学校便り・学年便り・学級通信の活用、ホームページの充実）。
- ・学校が主導し、避難施設開設訓練の実施や支え合い連絡会による児童の見守りの継続を要請し、互いに支え合える地域づくりに貢献します。
- ・ありがとうの会に向けた計画的な取組を進め、地域とのつながりに感謝の気持ち、それを伝えられる子どもを育てる教育活動を推進します。

(8) その他 — 本校独自の特色ある教育の継続

○ 「すべての児童の良さを伸ばす特別支援教育」—児童一人一人に最適な指導を「4種類の特別支援教育を連続して受けられるようにする円滑な連携」

特別支援教育では、「子どもたちが、自分に合った居場所を見つけ、自分の良さに気づけるようにして、できることをどんどん褒めて、その子に合う指導法で、力を伸ばしていく教育」という共通意識のもとで、全教職員が、児童観察を細やかにを行い、特に配慮を要する児童の理解に努めていきます。通常学級担任は、特別支援学級・特別支援教室担任と情報交換、指導法についての意見交換を積極的に進めます。特別支援教育担当教員は、自身の専門知識や指導力を活用して、一人一人の特性に合わせた指導を行い、その子のできることをじっくりと伸ばし、苦手なことも克服できるように支援します。そして、その実践を、通常学級担任に還元することで、「個別最適な学び」の実現を図ります。

- ・通常学級で、担任が一人一人の子どもたちの違いに合わせたユニバーサルデザインによる授業を推進します。
- ・配慮児童に対する校内支援体制を充実させます（個別支援計画、アセスメントシート、特別支援学級と通常学級の交流計画作成等）。
- ・特別支援教室（サポートルーム）での週1回の指導と適応指導を通して、担任との密な情報共有を図りながら、在籍学級での児童の状態の改善を図ります。
- ・みどり学級（知的障がい）の児童の様々な発達の違いや学力に合わせ、個別の教材などを使用し、生きる力となる基礎学力や生活力の定着を図ります。
- ・みどり学級（情緒障がい）は、教科書を使った少人数指導と、個々の課題は自立活動などで改善を図り、通常学級との交流授業を計画的に進めます。
- ・特別支援学級担任と特別支援教室担任との連携による自立活動の指導の充実を図ります。
- ・特別支援教育校内委員会の充実 ～ 複数の特別支援コーディネーターにより、アセスメントを行うケース会議を随時、迅速に行い、通常の学級から特別支援学級、特別支援学級から通常の学級へのスムーズな移動（転籍）を可能にしていきます。
- ・特別支援学校や教育センターによる専門性研修を計画的に行い、専門家による児童観察や教員研修を充実させ、地域の拠点となる特別支援教育を学校の大きな強みとして、近隣の小中学校との連携を進めます。

○ **SDGs** を意識した「多様性の尊重と共生社会の実現、国際理解と環境保全の心を育てる」 （オリ・パラ）レガシー教育と環境教育 — G (Green)・L (Legacy) 活動の充実

● G (Green) — 「みどりの本町田小」

—校庭の芝生を維持し、活用していくための体制づくりと環境教育の推進

- ・みどりの本小を子どもたちが守っていくための芝生の維持管理と活用、芝生養生中の子どもたちの体育授業や休み時間の遊び方指導の計画づくりを推進します。
- ・グリーンデー朝会（年3回）の設定や、芝生の活用・保護・管理・養生の計画的な維持（全学年・全職員での分担）のための体制を継続していきます。
- ・芝生の校庭を活用した体力向上やスポーツイベントの実施を、計画的に推進します。

● (O・P=オリンピック・パラリンピック) L (Legacy) 教育の計画の推進

—国際理解教育、国際交流、英語活動の充実と、共生社会実現のため教育計画の推進。

- ・外国の人々や文化に直接的に触れ合う機会を計画し、英語を使う機会を増やします。
(異文化を理解するオープンマインドと実践的な英語コミュニケーション能力の育成)
- ・将来の持続可能な社会のために、各学年に応じて自分たちができることを考える活動を計画していきます。
(多様性・相互性・有限性・公平性・連携性・責任性)
- ・東京2020大会をふり返り、フェアプレーの精神やボランティアマインドの醸成、障害者スポーツの理解促進による共生・共助社会に向けた他者を尊重する心を培います。



3つの重点目標・学校教育目標などを達成するための学校経営の土台
【人と人との繋がりの中で、学びの基盤を定着させる学校づくり】